

社会モデル, あなた, わたし

川添 睡

2019 年障害学会発表 読みあげ原稿

*質疑応答における機会是正の試みとして、発表に対する質問やコメントの、インターネットによる事前受け付けをしております。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSddjeFe_WtpUUL5EanGDSsM4Pseqsq8MlsyviihnZebP4Selg/viewform

いただいた質問は、質問者が希望した場合は

当日の時間にも一部を取りあげる時間を割きたいと思います。

何かご不明な点がありましたら

kawazoe.n.aa@gmail.com

までご連絡ください。

問題意識: 社会モデルへの無力化

川添です。今日は

「障害の社会モデルがどのように使われているのか」

に対して私が感じている疑問、

あるいはもどかしさについて考えます。

次頁>

私の疑問を大きくまとめると2つです。

①「社会モデルが説明されるとき、どうして頻繁に

社会モデルと矛盾するような事柄と結び付けて

同時に語られるのだろうか?」

②「社会モデルは社会に対する強い問題提起をしているのに、

どうして健全主義者は社会モデルを笑顔で説明出来るのだろうか?」

社会モデルと矛盾を感じる説明とはこのようなものです。

障害は個人ではなく社会にあります。

なので、私達健全者は障害のある人に対して

どのような環境を用意したらいいか考えましょう。

なぜ障害は社会にあるといいながら、

障害のある人という、個人に問題が属する言い回しをするのでしょうか。

どうして障害される方の個人的な環境調整には

関心があっても、健全者の特権や

その状況を支える、人間関係のシステムを変えること

はどこまでも後回しなののでしょうか。

私は、社会モデルは突き詰めれば

「社会が変わるべきだ」という主張だと思います。

青い芝の会の言い回しを借りるならば

「健全者文明を否定する」要素があるはずです。

社会モデルという言葉は現在、
行政、企業、研究機関に所属する立場の方々も
積極的に用いています。

しかし、今の社会において
健常者や健常主義が優勢である

これらの組織の方々が、
社会モデルの文言と向き合っても
自身の立場を脅かされたと感じないのだとしたら、
どこかで社会モデルの、あるいは障害される私たちへの
無力化が働いていないでしょうか？

[次頁>](#)

発表の構成

今回の発表では
前半に私は社会モデルをこう考えている、と表現して
3つの言葉に疑問を投げかけます。

みえない障害、軽度あるいは重度障害、そして
合理的配慮の要件である個別性です。

後半は、社会モデルが無力化される事と
深く関わるような語り手の振る舞いを挙げ、

声掛け・サポート運動を例に

差配の政治について考えます。

最後に、無力化と向き合う時に私が大切だと思う事をまとめます。

次頁>

社会モデルのベクトル性

私は社会モデルを、障害がどこに存在するのかの答えというよりは、

問題と向き合う時の

考え方や方向性、ベクトルのようなもの

として捉えています。

つまり私たちはしばしば

「問題」や、有利不利に関わらずひとが特別な状況にある時に、

それは個人的な出来事だ、と

人と状況を結び付け話を終わらせがちです。

でも本当は誰かに封じ込めて説明する事は間違っていないですか？

誰かに解決すべき問題がある、とされる時

その人の周囲の人にも変わるように巻き込んでみませんか。

周囲の人にも周囲の人なりの事情や望みがあるのなら

周囲の人の周囲 にいる人に対して

自分自身の望みも話に含めて、問題を大きくしてみませんか。

それでも難しいなら、社会の空気や制度へと

問題のあり方を広げませんか？

私はそのような、より広いものへ意識を向ける態度として

社会モデルを受け取っています。

次頁>

みえない障害？ 軽度の無力化？

そこで、みえない障害という言葉と軽度又は重度障害

という言葉の使い方について

全否定ではありませんが、一部疑問があります。

まず、どうしてみえない障害を研究すると言いながら、

実際にはだれか特定の個人を関心の対象に選んで

「その人のみえない障害」を特定しようとするのでしょうか？

「障害は社会にある」のに、

なぜみえないものを人からみいだそうとするのでしょうか？

障害の重度軽度という考え方も疑問です。

誰かを障害する事、無力化する事が

社会によって行われるのならば、

社会的に A さんへの障害が重度だとか軽度だとか

判定するという事は、社会の側から

「私は A さんを虐めているが、それは B さんへの虐めよりは小さな虐めだ」

と自己評価する言葉に聞こえます。

控えめに言って恥知らずですし、

ついでにいうと信憑性がまるでないと思います。

そういう訳で私は障害を重い軽いと量る立場を信じていません。

次頁>

わたしの怒りを盗むな

問題の個人化と関連させて、合理的配慮について述べます。

障害者差別解消法等では、

配慮や過重な負担の考慮には

「個別に」判断や実施をする点が強調されています。

これ自体には意義がありますが、

私の経験として

マイノリティの個人と配慮を新しく提供する組織とが

話し合いをする場合に

この個別性を組織にとって都合よく持ち出された事があります。

障害の分野に限りませんが、

マジョリティとマイノリティが交渉する、話し合う際には
マイノリティは強い制約を感じています。

マイノリティは交渉の場では良くも悪くも「過去の事例」が
判断に影響を与える事を知っていますし、

逆に今回自分がする交渉の内容が、
未来の前例として相手に使われる可能性も意識しています。

「今回限り自分が何とかなるならいい」とばかり、
個別的に区切って考えるとまずい、と感じている訳ですね。

特にマイノリティからみて、
相手の対応の中に普遍的な不平等の問題があると感じたときは
個別性から一旦離れて、一般的な理念を主張する事もあります。

相手の組織に構造的な不正義があるならば、
それと向き合わないと同じ対応を繰り返されるからです。

ですが、組織が
意識や体制を変える事を面倒くさがった場合、

指摘をかわすための道具として、
交渉の個別性を持ち出す事があります。

例えば私は
「私への配慮方法を今後の普遍的対応の前例とはしない」

と相手側から念押しされた事があります。

組織に不利益だと感じられた結果は、

「個別性」の名のもとに一例かぎりとして封じ込めて、

取捨選択できる構造になっていると言えます。

この構造を急にマイノリティが全て変える事は難しいのですが、

私は抵抗の気持ちを込めて、一つのスローガンを紹介したいと思います。

「わたしの怒りを盗むな」です。

[次頁>](#)

この言葉は、元々は 2016 年に

ある芸術大学ギャラリーのイベントで企画された、

「デリバリーヘルスのサービスを会場に呼ぶ」アートとされるものへの
抗議や、一連の出来事の問題点がまとめられたブログのタイトルです。

セックスワーカーは多くがセックスワークをしている事を

知人に公開していないので、

デリバリーヘルスの方を不意打ちで

不特定多数のいる場に出させるという事は、

とても多くのリスクと恐怖を負わせるものでした。

当日にサービスは会場に呼ばれずに、急きょ代わりとして

元セックスワーカーである事をオープンにしている

アーティストの方を呼んで、

その方は今言った説明を、丁寧に、しかし怒りを交えながら伝えました。

イベントの主催者の一人は終了後にその方と話して、

「何人かゲストを呼んできたけれど、今回が一番真のアカデミーでした」

と述べられたそうです。

「わたしの怒りを盗むな」とは、このように他人のリスクを弄び、

それに対する怒りも、アートやアカデミーだとして

消費する事に対する抗議が込められています。

先程の私の経験は、

怒りをアートや研究にされた、というよりは

個別性にかこつけて指摘した事をなかった事にされた、

という気持ちを「盗まれた」という言葉に託していて、

意味を元の言葉から少しずらしてしまっている事は

忘れてはいませんが、

そんな風に思っています。

[次頁>](#)

「声かけ・サポート」運動と差配の政治

私が社会モデルだとされる説明を聞いて、

不誠実だな、無力化されているなと感じる時、

「社会を変える」という話がされていても

現在その語り手自身が

健全主義社会で個人的に専有している特権のあり方

については話が及ばないように、

社会の想定範囲を狭めている事が多いです。

特権とは具体的にいうとこうです。

組織の中で予算をどのように配分するかの自由

メンバーに役職を割り振ったり、組織構成自体を管理する権利

自分たちの立場について、主体的に意見を広く伝える手段

そして、議論の中で「問題とは何か」「自分の役割とは何か」を設定できる主導権 です。

実際の所これらの特権は

今の形で再分配されても、

譲られた人が健全主義に組み入れられるだけなので、

私たちは別の社会のあり方を探す必要があります。

でも少なくとも特権を手放さない、

他へと開きたがらない人や組織は信用できない、と言えます。

次頁>

マジョリティが現在の特権の位置をそのままに

社会モデルを語る時、

差配の政治と呼べるような振る舞いをします。

自分の組織が今現在いろんな排除によって成り立っている、

という問題の設定ではなく、

自分は社会の他者を糺す役割だ、ということにして

声掛けを行う、差配するという事です。

差配の例として、「声かけ・サポート」運動を批判的に考えます。

これは全国の交通事業者各社が共催する、

障害者団体等の団体のほか、行政も後援・協力する運動です。

例えば駅構内ではこんなアナウンスが定期的に流されます。

「JR 東日本では声かけ・サポート運動への

ご協力をお願いしております。

お体の不自由な方などお困りの方を見かけましたら、

お手伝いしましょうか? といった積極的なお声掛けをお願いいたします。

また何々駅では目の不自由なお客様などが鉄道をご利用する際、

駅係員によるご案内を実施しております。

ご案内を希望するお客様は恐れ入りますが駅係員にお申し出ください。」

次頁>

私が感じる問題点は3つです。

① 駅という設備に対する事業者の責任や、

駅員の人件費も含めたコストを各利用者に押し付けている

② 予め、事業者にとって都合のよい振る舞いを繰り返し例示して、

駅の各利用者を支援/被支援という限定された役柄に誘導している。

③ 駅構内のスピーカーという音声情報のプラットフォーム自体を、

駅や健常者の立場からの情報で埋め尽くしている。

全体として、健常者の客は支援を提供すべき者、

駅と社会から障害される客は健常者からの支援を利用する者、

そして事業者は支援を支援するもの、

という役割が事業者自身によって差配されています。

私たちは社会という言葉を

ここではないどこか、自分ではない誰か

という位置に置いて話す事を許さずに、

今ある世俗の権力の移動について、

社会と自分とを繋げて話さないといけません。

次頁>

無力化の政治に向き合う上で大切な事

発表をまとめます。無力化の政治に向き合う上で大切だと思う事を3つ挙げます。

1つ目は、問題を社会モデル「に」求めない事

無力化の問題を社会モデルの限界や瑕疵

であると封じ込めるように意味づけて、

外からそれを操作する姿勢からは離れて、

私たちが社会モデルの言葉に何を期待したのか、

これまでどの様に言葉を取捨選択して繰り返してきたのか、

すべきなのか、という自分との関わりとして話し合いませんか。

2つ目は私たちの中にある不平等に向き合う事

階級の話をしてします。

私たちは「地域でみんなと暮らす」という夢があります。

その夢の中の人間関係では、

野宿者はどんな風に暮らしていけるでしょうか。

難民申請者や書類のない外国人を収容する施設は「地域」なのでしょうか。

不安定な在留資格で日本で働いていたり、

あるいは就労を禁じられた方たちからは、

私たちのような者は産まれないのでしょうか。

なぜ障害される私たちの夢は、

経営者、アスリート、学者

等ばかりが取り上げられてきたのでしょうか。

私たちは「私たち」と呼ばれてきた人たちの中の排除について、

それを支える夢の中身自体と向き合わないといけません。

3つ目は身体と経験を日常的に感じ取る作業、

そしてそれをもう一度社会的な文脈に置きなおす作業を

大事にしたいという事です。

私たちの日常的な経験には、

障害、無力化とを感じるものもあれば、

今の社会では健常、有力化と呼ばれるものもあるはずです。

そのような経験も含めて、

自分のどのような出来事に対して

社会からはどういう意味付けをされていくのか、

それは本当にフェアな割り当てなのか、

自分の身体感覚を丹念に追い、

社会的な意味を再配置していく作業が大切なのだと思います。

ありがとうございました。